

奥州福島城下大火之図

この板倉藩の城と城下の図は、上が北で南は阿武隈「大熊」川である。東に本丸、その西方区画はすべて二の丸、北の大手門の正面は御殿（居宅）である。本丸の上方は北二の丸・三の丸で、その左方は籠（牢）屋とある。

図の西辺、北辺の道が奥州街道で、北辺東端で北に折れて仙台に至る。

図に年号はないが、西辺街道の上方内側に朱点と「火元」の注記がある。ここは元（本）町で、『福島沿革誌』に「宝永三年（1706）二月四日元町塩屋半三郎宅より出火、西風烈敷城内不残」とある。元町からの出火はこの一件のみである。右下の注記に、「一、城内居宅不残 一、同米蔵二ヶ所 一、同侍家九軒 一、同長屋式百間余 一、同馬屋壱ヶ所 一、城外侍屋敷六軒 一、同籠屋敷 一、町家式百九拾二軒内寺二カ所」とある。長屋二百間余とあるのは戸数換算であろう。

凡例に、朱線の囲みは焼失分と記され、城内で焼け残ったのは大手門付近と北二の丸のみである。本図は幕府月番老中への火災報告の付図で、公文書の控と推定される。

板倉侯入部前 2年間は幕領竹村代官、その前は堀田正虎十万石で、共に城絵図は残っていない。本図で御殿の園池を代官が内堀とし、御殿が代官所とされ牢屋があり、牢屋の堀が大手東堀と連続していることが判明した。建物に新・古とあり、新は板倉の新築で古は堀田・代官時代の建物と推定される。

板倉氏の系譜は、勝重（太祖 家康重臣 京都所司代）- 重昌（藩祖 島原の乱征討上使）- 重矩（老中 京都所司代）- 重種（寺社奉行 老中）- 重寛で、小藩ながら譜代の名門として奥州外様大藩の目付の役があった。

重寛が信濃国坂木の陣屋より、福島三万石へ国替えを命じられたのは1702年（元禄15）12月2日、初入部のため江戸を発ったのは1704年（宝永元）

8月7日だから、一年半後の災難である。代官所跡に入った重寛は、城普請を命ぜられて造作に取り掛かり、宝永2年4月天守代用の「時太鼓櫓」を大手門西出隅石垣の上に建設した。259人の家臣のため大身の屋敷と小身の長屋の建築中であった。

図において朱線で囲まれた屋敷・長屋は30軒で、新と古は半々で図の注記に「城内不残」（焼）とあるが、四分の一は残っている。新築 1年の櫓は残り、焼失屋敷・長屋のうち10軒は古屋敷だったことは幸いであった。

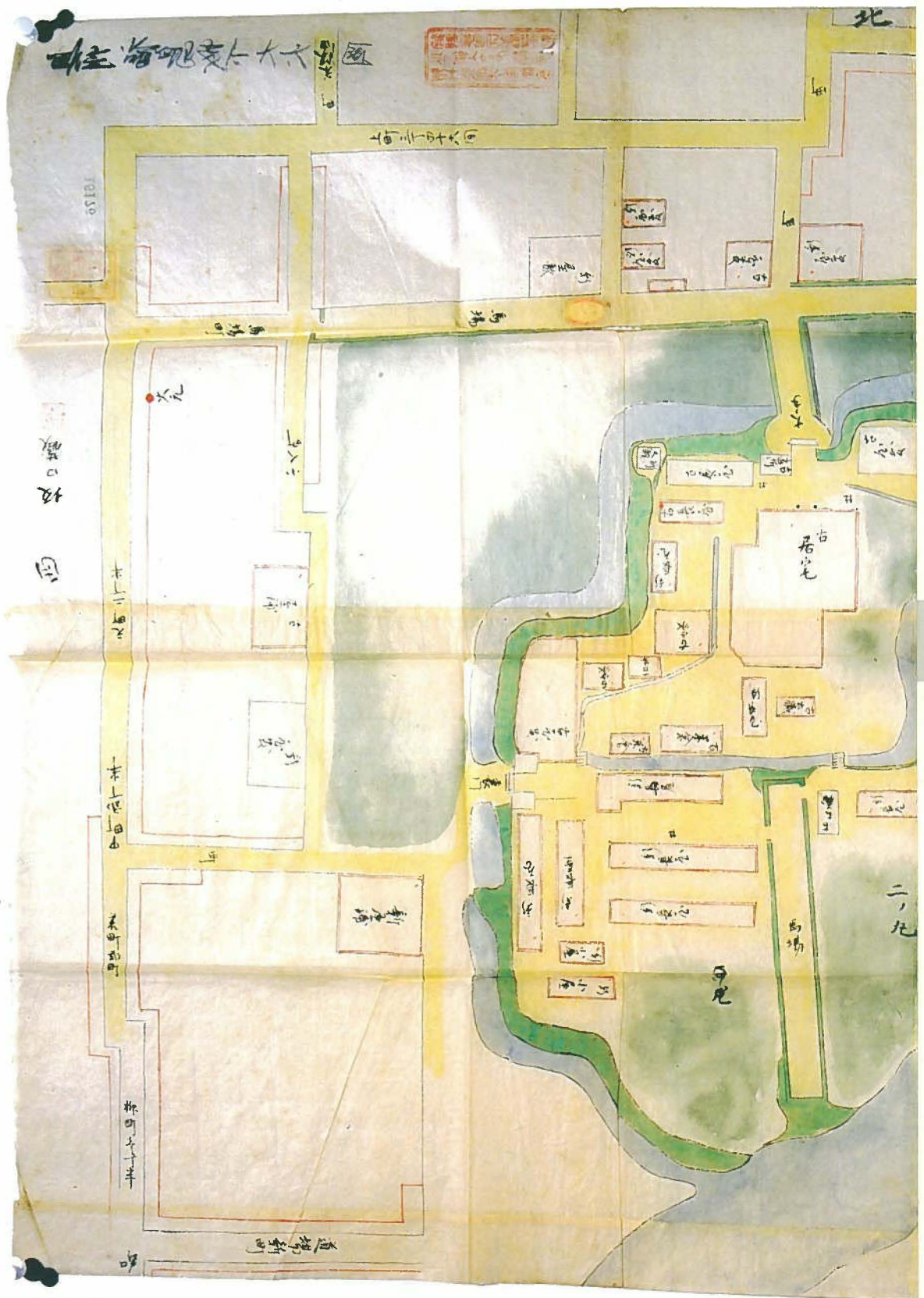
北上する奥州街道は、城の南西で荒川を渡ると江戸口枡形があり、最初が柳町（距離・戸数は1町36間 82軒）荒町（2町15間 96軒）中町（2町25間 116軒）本（元）町（中間で右折 2町3間 110軒）上町（東で左右折れ 3町46間 246軒）北南町（東端で左折 3町42間 110軒）馬喰町（1町20間 35軒）で北端に仙台口枡形がある。七町中被害のないのは上町と馬喰町のみで、29軒が焼失し、城内のほぼ全焼と合わせて入部間もない板倉藩政に大ダメージを与えた。

『福島沿革誌』『板倉御歴代略記』から、近世板倉藩の火災記録を拾ってみよう。

1703年竜鳳寺より出火。 本件。 1707年上町より出火。 1712年城内より出火。 1722年宝林寺より出火。 1735年上町より出火。 1748年上町より出火。 1750年羽黒権現より出火。 1770年柳町より出火。 1777年荒町より出火。 1786年城中より出火。 1839年庭坂口より出火。 以上12件中、の被害は侍屋敷8軒・町家33軒・寺5で最大規模であるが、城内全焼と合わせての本件が史上最大となろう。

火災発生件数は18世紀100年で11回、19世紀70年で1回はきわめて注目される。

鈴木 啓（福島県考古学会会長）



奥州福島城下大火之図／東北大学附属図書館蔵



陸奥福満

- 焼失分
- 残家
- 道
- 去居
- 堀
- 川
- 草場

- 一 城内居宅不残
- 一 同米菴二ヶ所
- 一 同約家九軒
- 一 同長屋或百餘
- 一 同了屋 五ヶ所
- 一 城外仍居五六軒
- 一 同口比知支

一 所家或百九軒二軒
 同年二ヶ所